

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第326集

下醍醐遺跡発掘調査報告書

県営担い手育成基盤整備事業原体地区関連発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団

埋蔵文化財センター

下醍醐遺跡発掘調査報告書

県営担い手育成基盤整備事業原体地区関連発掘調査

序

豊かな自然に恵まれた岩手県には、縄文時代をはじめとする数多くの遺跡や重要な文化財が残されております。これら多くの先人たちの創造してきた文化遺跡を保存し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。

一方では、地域開発に伴う社会資本の充実も重要な施策であります。発掘により遺跡が消滅することはまことに惜しいことではありますが、その反面それまで闇に包まれていた先人の営みに光明があたるのも事実であります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和も今日的課題であり、(財)岩手県文化振興事業団は埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、記録保存する処置をとって参りました。

本報告書は、県営担い手育成基盤整備事業原体地区に関連して平成10年度に発掘調査を実施した江刺市の下醍醐遺跡の発掘調査結果をまとめたものであります。調査によって多くの縄文時代中期の遺物が出土し周辺に同時期の遺構の存在を知らしめることとなりました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成にご援助・ご協力を賜りました岩手県水沢地方振興局水沢農村整備事務所や江刺市教育委員会を始めとする関係各位に心から感謝申し上げます。

平成11年11月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 船越昭治

例 言

1. 本報告書は、岩手県江刺市田原字高野前95ほかに所在する下醍醐遺跡の発掘調査結果をまとめたものである。
2. 本遺跡の発掘調査は、県営担い手育成基盤整備事業原体地区に伴い岩手県教育委員会と水沢地方振興局水沢農村整備事務所との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。
3. 本遺跡の成果は、平成10年度分の岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査第311集「岩手県埋蔵文化財発掘調査略報」に公表したが、本書を正式な報告とする。
4. 岩手県遺跡登録台帳における番号と調査時の遺跡略号は、以下の通りである。
遺跡番号・・・NE08-2047 遺跡略号・・・SDG98-N
5. 調査期間・調査面積・調査担当者は、以下のとおりである。
調査期間 平成10年6月15日～6月30日 調査面積 280㎡ 調査担当者 木戸口俊子・佐々木志麻
6. 室内整理期間と整理担当者は、以下のとおりである。
室内整理期間 平成11年3月1日～3月15日 整理担当者 木戸口俊子
7. 本報告書の執筆は「Ⅰ 調査に至る経過」を高橋與右衛門、そのほかを木戸口俊子が担当した。
8. 分析鑑定及び委託業務は次の方々へ依頼した。(敬称略)
石質鑑定：花崗岩研究会 基準点測量：(株)アクト技術開発
9. 国土地理院発行の地図を複製したものは図中に図幅名と縮尺を記した。
10. 遺構の埋土観察には、農林水産省技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』を参考にした。
11. 本報告書に掲載した実測図の凡例については、「Ⅲ 調査方法と整理方法」に掲載した。
12. 発掘調査においては江刺市教育委員会をはじめ地元の方々にご協力をいただいた。
13. 本遺跡から出土した遺物及び調査にかかわる資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管してある。

目 次

序・例言

<本文・表>

I 調査に至る経過	1
II 立地と環境	
1. 遺跡の位置	1
2. 地形・地質	2
3. 基本層序	3
4. 江刺市の遺跡	3
III 調査方法と整理方法	
1. 野外調査	7
2. 整理方法	7
IV 調査結果及びまとめ	11
第1表 周辺の遺跡表	6

<図版・写真図版>

第1図 岩手県図	2
第2図 地形図	3
第3図 基本層序	3
第4図 遺跡位置及び周辺の遺跡図	5
第5図 遺跡周辺地形図	8
第6図 遺構配置図	9・10
第7図 焼土及び出土遺物	12
写真図版1 近景・焼土	15
写真図版2 遺物	16
報告書抄録	16

I 調査に至る経過

下醍醐遺跡は、「県営担い手育成基盤整備事業原体地区」の工事施行に伴い、その事業区域内に位置することから発掘調査することとなったものである。

原体地区は、江刺市の東部4kmに位置し、地区の中央部を伊手川（一級河川）が南北に流下しており、その兩岸に開けた比較的平坦な水田地帯である。昭和32年～昭和33年にわたり積寒事業による区画整理がなされたが、区画が10aと狭小で農道及び用排水路等は不備であり、大型機械化作業体系導入や農地流動化の大きな阻害要因となっている。「県営担い手育成基盤整備事業原体地区」は、生産基盤と生活環境の一体的整備及び効率的で安定的な経営体が、地域農業の中心となり農業生産を担うという農業構造の確率を図るため実施するものである。

当事業の施行にかかる埋蔵文化財の取り扱いについては、岩手県水沢地方振興局江刺農林事務所から平成8年10月4日付江農林土改第1679号「担い手育成基盤整備事業実施に伴う遺跡分布調査について（依頼）」の文書によって岩手県教育委員会に対して分布調査の依頼をしたのが最初である。依頼を受けた教育委員会では、平成8年10月24日及び11月6日～7日に分布調査を実施した。その結果は、平成8年11月13日付教文第691号「担い手育成基盤整備事業実施に伴う遺跡分布調査について（回答）」で江刺農林事務所へ回答し、その際今後土木工事などに着手する場合には、あらためて文化課と協議するよう付記された。

回答を受けた江刺農林事務所では、平成9年6月5日付江農林第486号「県営担い手育成基盤整備事業原体地区に係わる遺跡の工事施行の通知について」の文書で、岩手県教育委員会に文化庁長官あて通知文書の通達をお願いした。

岩手県教育委員会では、平成9年6月10日付教文第7-59号「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」の文書で工事着手前に確認調査（試掘）を実施するように通知された。

通知を受けた江刺農林事務所では、平成9年10月22日付江農林第487号「担い手育成基盤整備事業における埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」の文書により岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。依頼を受けた岩手県教育委員会では、平成9年11月17日～18日及び12月2日に試掘調査を行った。その結果は、平成9年12月12日付教文第752号「担い手育成基盤整備事業原体地区に係わる埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」で江刺農林事務所へ回答し、その際現状で保存できない場合には、別途調査が必要であることが付記された。

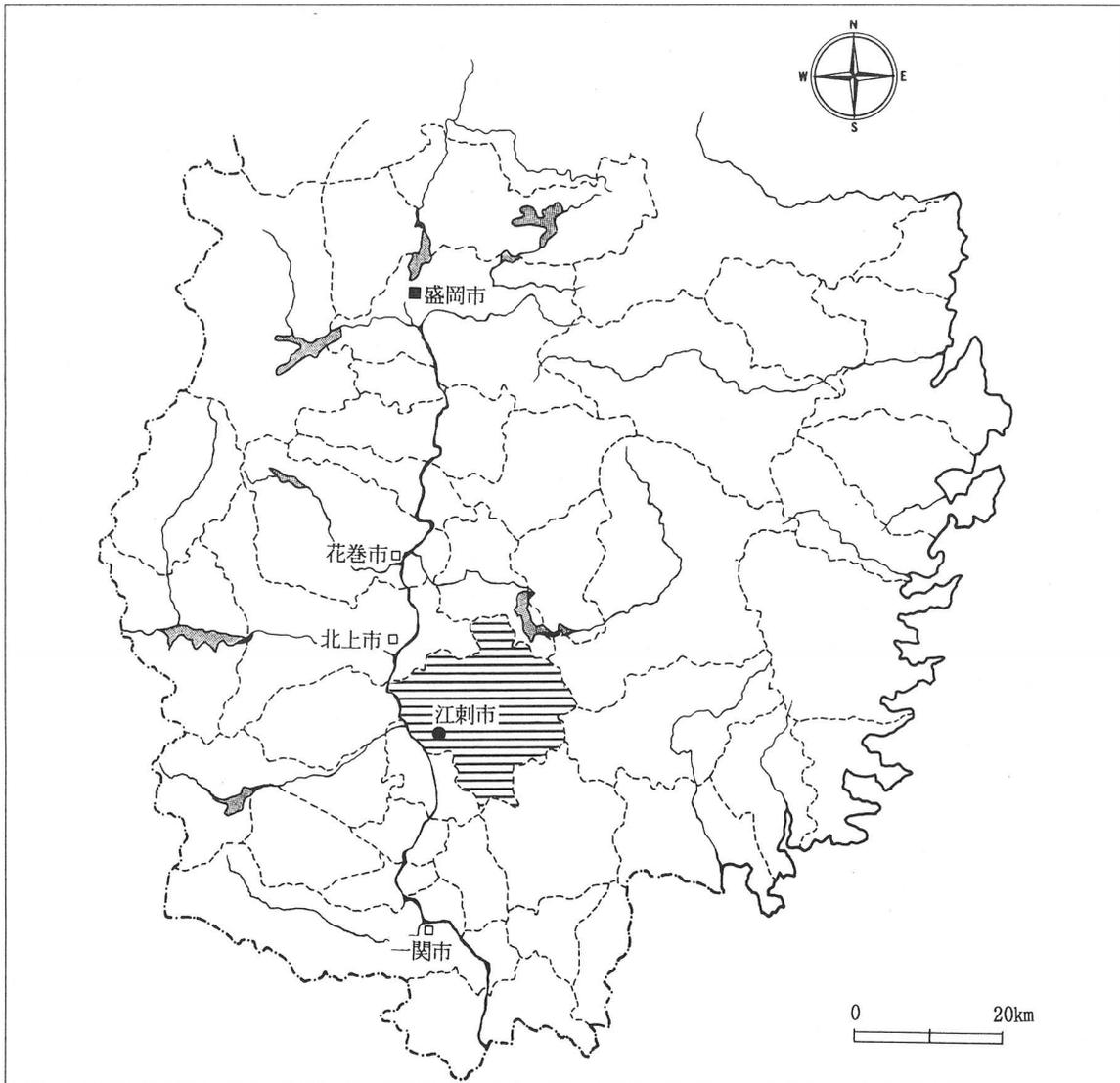
II 立地と環境

1. 遺跡の位置

下醍醐遺跡は、江刺市田原字高野前95ほかに所在し、東北新幹線水沢江刺駅から北東約3km、江刺市役所の南東約3.6km付近に位置する。北上川中流域の県南中央部にある江刺市は、北は北上市、和賀郡東和町、東は遠野市、気仙郡住田町、南は水沢市、東磐井郡大東町、西は水沢市、胆沢郡金ヶ崎町と隣接し、総面積360.77㎡を有する。遺跡は市内南方を東西に走る県道玉里－水沢線の醍醐橋北側にあり、3.5km先の北上川に注ぐ伊手川左岸の沖積地にのっている。北緯39° 10' 10"、東経141° 12' 37" 付近である。

2. 地形と地質

当遺跡のある江刺市は大きく3分類される。東に大森山(820m)、物見山(870.6m)、阿原山(782.1m)、蓬萊山(787.8m)などの高山がそびえるのに対し、西は明神山、笠根山、阿茶山など500~600mの低山地が続く丘陵地帯となっている。これらに囲まれて北上川に注ぐ広瀬川、人首川、伊手川、小田代川、大田代川が山地や丘陵地を流下しながら、沖積平野を形成している。下醍醐遺跡のある田原地区の中央部は阿原山を源とし、市南西部で人首川と合流する全長30km程の伊手川によって開析された平地である。遺跡は当地区のほぼ中央にあたり伊手川はここで大きく西流しており舌状の張り出しを形成している。普段の水量は多くないが、ほぼ360度蛇行する流路のために西側の右岸を常に浸食している。また雨天の日には短時間に水量が増えることから洪水の危険性もあり、古くから何度となく浸水している地域でもある。江刺平野の基盤は新第三系鮮新統玉里層で下部は凝灰質頁岩・砂岩が発達しており、砂質部を挟んでいる。また上部には数層の亜炭層を挟む。田原地区についてはこの基盤に伊手川による洪水などの河川作用と思われる砂礫層が数層挟まり、自然堤防状の高まりも見られる。調査区域の標高は約46mである。



第1図 岩手県図



第2図 地形図

3. 基本層序

調査区内の基本層序は下記のとおりであるが、場所によっては浸水作用などで砂層が厚く堆積しているなど若干の違いはある。

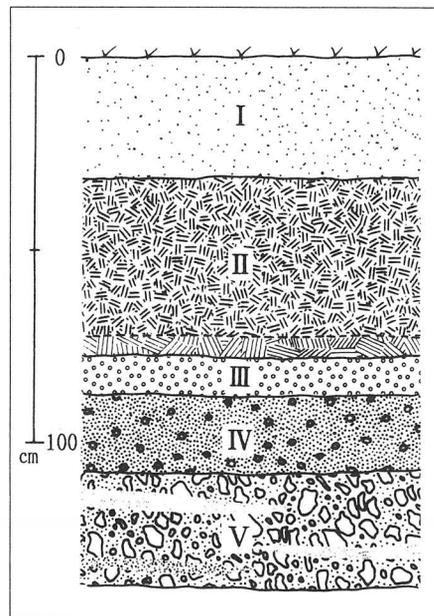
I : 10Y R 3 / 3 暗褐色シルト 粘性・しまりなし 草根多量に入る 耕作土 30cm

II : 10Y R 3 / 2 黒褐色シルト 粘性・しまりややあり 10%砂含む 旧耕作土 土器多量に含む 下位10Y R 3 / 1 黒褐色砂金雲母多量に含む 層状に酸化鉄土あり 50cm

III : 10Y R 4 / 1 ~ 3 / 1 黒褐色砂 粘性ややあり しまりなし 金雲母多量に含む 酸化鉄土層状にあり II層よりも粗 10cm

IV : 10Y R 4 / 3 にぶい黄褐色砂 粘性・しまりなし 酸化鉄50% 層状に10Y R 3 / 1 黒褐色シルト (粘性あり・しまりややあり) 含 金雲母多量に含 下位にいくほど砂の粒が大 20cm

V : 10Y R 3 / 2 黒褐色砂 10Y R 5 / 4 にぶい黄褐色砂 10Y R 3 / 1 黒褐色砂 10Y R 5 / 2 灰黄褐色砂が斜状・带状に交互に堆積 粘性なし しまりなし 下位ほど粗 35cm



第3図 基本層序

4. 江刺市の遺跡

平成10年度の岩手県教育委員会の遺跡台帳によると江刺市では288カ所の遺跡登録がなされている。縄文時代が114カ所と最も多いが、ほとんどの遺跡が複合遺跡である。

江刺市の旧石器時代の遺跡は大変少ない。局部磨製石斧・尖頭器が出土した岩谷堂大名野遺跡、ナイフ形石器が出土した稲瀬鶴羽台遺跡ぐらいである。

縄文時代に入ると、丘陵や台地上に遺跡が増え、これらの遺跡の本格的な調査は東北新幹線関係の発掘調

査以降である。五十瀬神社前遺跡では縄文時代中期末葉の大木9式土器が多量に出土しており、土器とともに堅穴住居跡や炉、ピットが検出されている。瀬谷子遺跡では集石遺構が検出されているが、出土している遺物は縄文時代中期末葉の大木10式土器を中心に縄文時代後期中葉、縄文時代晩期のものがほとんどである。

岩手県の弥生時代の遺跡の多くは胆沢平野に集まっている。江刺市内では、沼の上遺跡から初期の遺構とともに土器が見つかった。また、遺構は検出されなかったが、弥生時代中期前半の土器と石器が落合Ⅰ遺跡から出土している。稲作文化を示すものに粃痕のある土器が出土した兎Ⅱ遺跡がある。該期の遺構は検出されなかったが、弥生時代の各期の土器が豊富に出土し、当地区の土器の変遷を垣間見ることができる。

古墳時代は胆沢町南都田に北限の前方後円墳である角塚古墳があり、水沢市内ではその築造時期に近い中半入遺跡や面塚遺跡など調査され始めているが、江刺市内ではまだ明らかではない。角塚古墳よりやや新しくなって兎Ⅱ遺跡では、奈良時代末～平安時代前半の堅穴住居跡4棟が検出しており、それ以降は数多くの遺跡で豊富な資料を提供している。

平安時代初期の集落としては落合Ⅲ遺跡、力石Ⅱ遺跡がある。特に力石Ⅱ遺跡では1つの住居跡から武器である鉄鏃を含む鉄製品が10点を超えて出土しており、また石帯出土など、律令体制との関わりを示す重要な遺跡である。9世紀初頭から10世紀後葉まで時期区分が可能な遺構や遺物が出土しているのは宮地遺跡である。23棟の住居跡に伴う遺物などにより4期に分けている。落合Ⅱ遺跡では約240個体にのぼる墨書土器や木簡、灰釉陶器などが出土しており、一般集落ではなく江刺郡衙跡的地域であったことを示している。落合Ⅰ遺跡では9世紀後半～11世紀代にかけての堅穴住居跡の他に、土師器坏の自給自産をしたとみられる遺構も確認されており、自給自足を旨とした古代集落の有様をみることができる。その他9世紀～10世紀末にかけての住居跡は朴の木遺跡、谷地遺跡、鴻ノ巣館、兎Ⅱ遺跡、この時期の遺物は力石遺跡、中屋敷遺跡などで確認されている。市内北西に位置する瀬谷子窯跡群では数多くの須恵器焼成窯や瓦を焼いた窯などの存在から、胆沢城経営さらに近隣集落に必要な生活雑器を供給したとみられている県内最大の生産遺跡である。

中世以降の遺跡については、現在70カ所ほど知られているが、調査例が少なく実態は不明である。

下醍醐遺跡の南方に醍醐寺跡とされる伝承地がある。京都山科の醍醐寺の上醍醐、下醍醐の地名と寺社名をとった地と言われている。開田される以前は台地上に縄文時代中期頃の多くの土器片が出土し、10世紀頃と考えられる須恵器片も表採され、寺院跡・坊舎跡とみられる段々もあつたようである。現在は水田となり以前の段々状の台地はおもかげを残すのみとなった。

そのほか北西には藤原経清が築いたとされる豊田館（豊田城）跡、藤原経清塚とされる五位塚古墳群、北には虚空蔵遺跡、昭和63年に調査された松川遺跡がある。松川遺跡では8世紀末～9世紀前半代と見られる集落の他に縄文土器、弥生土器、住居跡に伴う土師器、須恵器、中国青磁なども出土している。

<参考文献>

- 1985 「岩手県」角川日本地名大辞典3 角川書店
- 1990 「岩手県の地名」日本歴史地名大系3 平凡社
- 1969 岩手県江刺市瀬谷子窯跡群 緊急調査概要 窯業史研究所
- 1970 岩手県江刺市瀬谷子窯跡群 第2次緊急調査概要 窯業史研究所
- 1977 沼の上遺跡 岩手県埋文センター文化財調査報告書第5集 (財)岩手県埋蔵文化財センター
- 1979 主要地方一関北上線関連遺跡発掘調査報告書第8集 (財)岩手県埋蔵文化財センター
- 1979 東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 岩手県文化財調査報告書第33集 岩手県教育委員会
- 1980 東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅳ 岩手県文化財調査報告書第48集 岩手県教育委員会
- 1980 東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅴ 岩手県文化財調査報告書第49集 岩手県教育委員会
- 1980 東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅵ 岩手県文化財調査報告書第50集 岩手県教育委員会



第4図 遺跡位置及び周辺の遺跡図

水沢・北上 1 : 50,000

番号	遺跡名	種別	遺構・遺物	時代
1	大塚	散布地	縄文土器(晩期)	縄文
2	雲南田	散布地	縄文	縄文
3	丸田	散布地	須恵器	平安
4	大名野	散布地	土師器、須恵器、縄文土器(晩期)、石斧、石槍、石匙、石鏃	縄文・古代
5	丸田	散布地	縄文土器、石鏃、剥片	縄文
6	中野	散布地	縄文壺(晩期)	縄文
7	根岸洞穴	洞	縄文土器(中期)、石鏃、石匙、曲玉	縄文
8	根岸寺跡	寺院跡	縄文土器(中・晩期)、須恵器、土師器、石鏃、布目瓦	縄文・古代
9	束間	集落跡	須恵器	古代
10	岩谷堂城	城館跡	本丸、二の丸、三の丸、帯郭	中世
11	裏手丘上古墳	古墳	塚	
12	観音堂沖地	散布地	須恵器、土師器、ハゲ目の骨壺	古代
13	宮野	集落跡	土師器、須恵器	古代
14	三百刈田	集落跡	縄文土器、土師器、須恵器	縄文・古代
15	落合	集落跡	土師器、須恵器、木製品、陶磁器	古代・中世
16	寺田	散布地	土師器、須恵器、弥生	弥生・古代
17	寺田	散布地	縄文土器、土師器	縄文・古代
18	後田	散布地	土師器	古代
19	豊田城	城館跡	土師器、須恵器	古代
20	五位塚古墳群	古墳群	塚	
21	虚空蔵	散布地	土師器	古代
22	高野前	散布地	土師器	古代
23	醍醐寺跡	散布地	縄文土器、弥生土器	縄文・弥生
24	内館	散布地	縄文土器、石器、土師器	縄文・平安
25	藤の森古墳	古墳	塚	
26	勝軍寺跡	寺院跡	縄文土器(中・晩期)、土師器、須恵器	縄文・古代
27	妻の神古墳	古墳	縄文土器(後期)、人骨	縄文
28	虚空蔵館	城館跡	堀・土塁	中世
29	石山	散布地	須恵器	古代
30	後田	散布地	土師器	古代
31	力石	散布地	弥生、土師器、砥石、焼土	弥生・古代
32	鴻ノ巣館	城館跡・集落跡	土師器、須恵器、住居跡、堀	(平安)、古代
33	力石	散布地	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器	縄文・古代・中世
34	力石	集落跡	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器	縄文・弥生・古代
35	中屋敷	散布地	土師器、須恵器	古代
36	前広	散布地	土師器	古代
37	御免	散布地	縄文土器	縄文
38	松川	散布地	土師器・須恵器	古代
39	鹿野	散布地	縄文土器	縄文・平安
40	羽黒堂	散布地	石鏃	縄文
41	窪田	散布地		平安
42	外浦洗田	窯跡	須恵器	平安
43	四前田	古戦場		
44	中前田	集落跡	弥生土器、土師器、須恵器	弥生・平安
45	北野田	散布地	土師器・鉄滓	弥生・奈良・平安
46	野田	散布地	土師器、石鏃	縄文・平安
47	北野田	散布地	弥生土器・内黒・土師器	弥生・平安
48	杉の堂	散布地	縄文土器(後・晩期)、大洞、実形品、壺、深鉢、注口	縄文・平安
49	沼尻	散布地	土師器	平安
50	大石学	集落跡	土師器、須恵器、フレーク	縄文・平安
51	石名坂	集落跡	縄文土器・石鏃	縄文
52	大内田前	散布地	土師器、須恵器	平安
53	鶴ノ木新田南	散布地	縄文土器	縄文・平安
54	鶴ノ木新田上	散布地	チップ	縄文
55	鶴ノ木南台地	散布地	縄文土器、アメリカ式石鏃、すり切り石斧	縄文・弥生
56	鶴ノ木住吉	散布地	縄文土器(前・中・晩期)、土師器、須恵器、打製石斧、管玉、柱状ビット	縄文
57	日坂森東	散布地	縄文土器(中期)	縄文
58	日坂森	散布地	縄文土器(中期)、石鏃、石斧、石棒	縄文
59	北鶴ノ木西	散布地	石鏃、打製石斧	縄文
60	北鶴ノ木方八丁	城館跡	縄文土器、堀、複郭、平場	縄文・中世
61	旧羽田中	散布地	縄文土器・土師器・須恵器	縄文・平安
62	鍋淵	散布地	縄文土器・石器	縄文
63	水無沢	散布地	縄文土器・石器	縄文
64	大田代城	城館跡	平場、郭、堀	中世
65	意館(とびが森館)	城館跡	平場、帯郭、堀	中世
66	館ヶ森館	城館跡	井戸	中世

第1表 周辺の遺跡表

Ⅲ 調査方法と整理方法

1. 野外調査

当調査に入る前に同遺跡名の伊手川河川改修工事に伴う調査(4,600㎡)に入った(これ以降「土木分」とする)。通常調査を順調に進めかつ正確に遺構などを記録するためにグリットを組むわけだが、今回の調査区は大変狭くまた土木分の調査区と接しているため、土木分の調査区内に設けた基準点及び補点を活用した。また土木分のグリットの延長上に当該調査区があるため、グリットについても遺構配置図の通り活用した。基準点、補点の座標軸の値は次の通りである。

基 1	X=-92,400.000	Y=32,580.000	H=46.322m
基 2	X=-92,440.000	Y=32,580.000	H=46.323m
補 1	X=-92,440.000	Y=32,600.000	H=46.264m
補 2	X=-92,400.000	Y=32,564.000	H=46.482m
補 3	X=-92,340.000	Y=32,580.000	H=46.712m

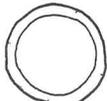
粗掘は、調査区の遺物の含まれない表土のみ重機により除去し、その後人手により徐々に下げ遺構検出に努めた。精査は基本的に2分法による埋土の観察を行った。遺物は、遺構内からの出土は遺構名と埋土層位を記入し、遺構外の場合は小グリット単位で層位を記入し取り上げている。遺構の記録には、主に実測図作成と写真撮影により行い、実測図に表現できないものはフィールドカードに記録した。作図は平板測量を用い、縮尺は基本的に20分の1としたが、火山灰の範囲など面的に広がりを持つものは100分の1で実測した。写真は、遺構の検出状況、埋土堆積状況、まとめて遺物が出土した場合にはその出土状況を撮影している。フィルムは35mmのモノクロームとカラーリバーサルフィルム、さらにモノクロは6×7判のものも使用した。

2. 整理方法

図面の点検・遺物の洗浄・写真の整理は、野外調査と並行して行った。遺構図面は、点検後に第2原図を作成した。挿図中の縮尺は原寸であり、遺構配置図等にはスケールを付してある。なお、使用したスクリーントーンの種類は凡例のとおりである。遺物は、洗浄後遺構内外に分けて注記・接合・復元を行い、報告書に掲載するものを選択・登録を行った。そして、写真撮影・実測(土器の場合拓本も含む)・トレース・図版作成と作業を進めた。報告書に掲載した遺物は、遺構内からの出土遺物が少なく、遺構外出土も磨滅が著しくほとんどが文様の不明のものばかりであった。そのため、調査区外であったが、同時期の遺物と思われる土器を参考に掲載した。土器は2分の1の縮尺で掲載している。野外調査中に撮影した写真は、フィルムの規格ごとにモノクロはネガアルバムに、リバーサルフィルムはスライドファイルに整理した。いずれも撮影順に整理し台帳に記載した。遺物写真は、35mmフィルムで撮影し、現像後撮影順に整理を行った。なお、遺物撮影は当センターの写真技師が担当した。図版中の縮尺は2分の1で掲載している。

〈凡例〉

遺構

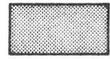
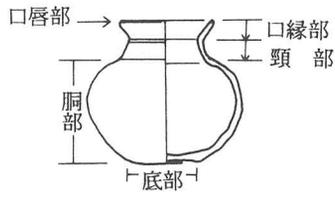


平面



断面

縄文土器



焼土



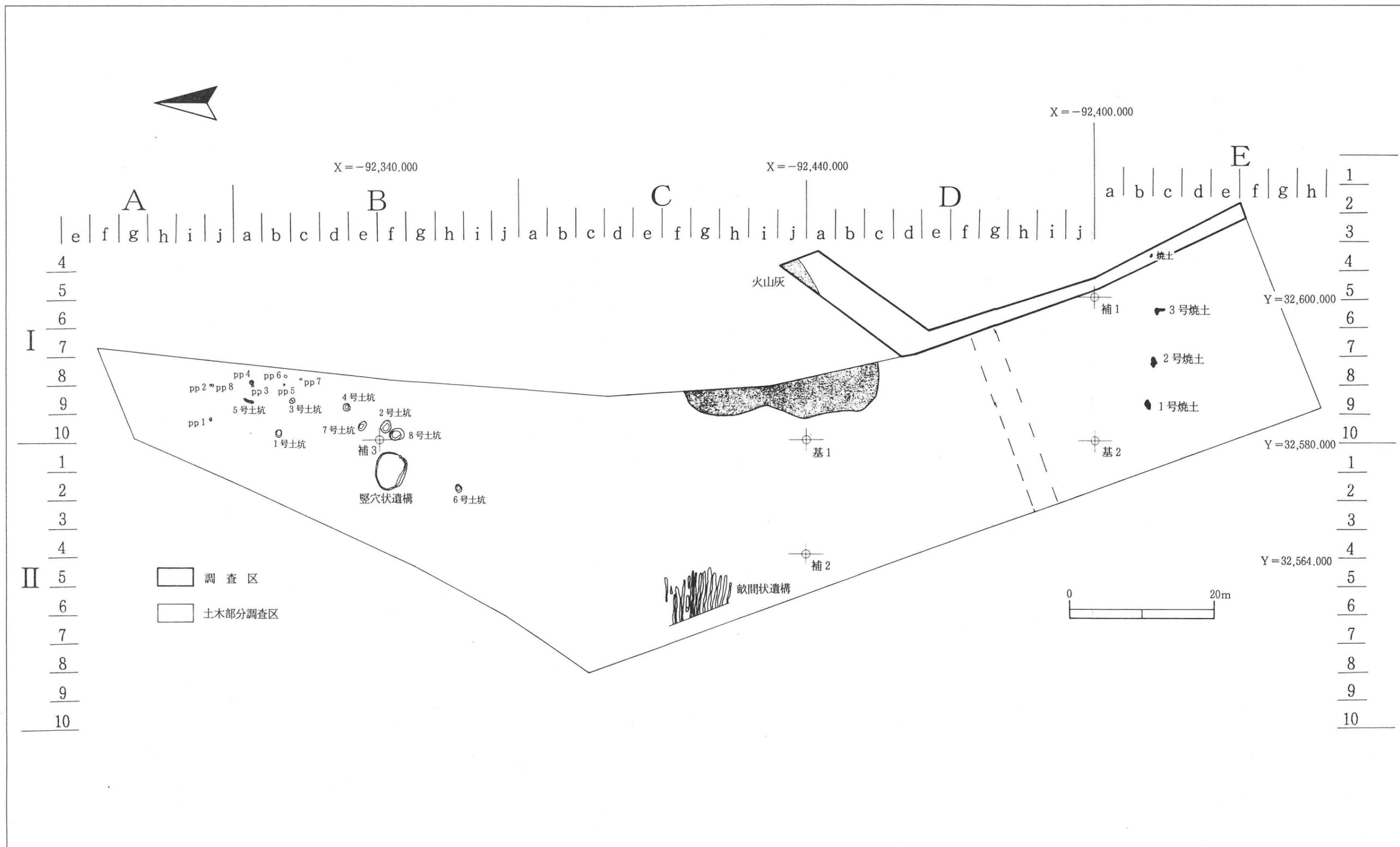
地山



火山灰



第5図 調査区周辺地形図



第6図 遺構配置図

IV 調査結果及びまとめ

1. 調査概要

調査区は伊手川河川改修工事に伴う調査区（土木分）に接している。この調査区は伊手川沿いに長く延びており、南北方向に長い10枚を超える水田が北側を除いてさほど段差を持たずに整然と並び、一部は蒲などが生える休耕田となっている。当該調査区は土木分の調査区東側にあり、工事が入る直前まで水田になっていたところである。調査区のほぼ中央部を農道が通っており、農道より北側は道路際が調査区となる。道路を挟んで南側調査区は昭和30年代に実施されたほ場整備による客土があり、この客土の中に縄文時代中期の土器が多く含まれていた。ただし、大変磨滅しているため一部のみ掲載した。また遺構としては同様に客土中から焼土が1基検出された。北側調査区からは表土の下からは南側調査区にあった客土は見られず、遺構や遺物の存在が期待されたが、実際は道路際ということもあり、道路造成時の礫が多量に入り込み遺物もほとんど出土されなかった。表土および道路造成時の礫を取り去ると北東隅に火山灰が薄く堆積していた。火山灰は10世紀前半に降った十和田a降下火山灰である可能性が高い。この火山灰の下からはグライ化した層が厚く堆積しており何も出土せず、遺構も検出されなかった。

2. 遺構

<焼土>（第7図）（遺物第7図-1）

I E 4 b グリット内より検出された。不整形を呈しており、長軸は47cm、短軸は11cm、焼土の厚さは4cmしかない。前述のとおり客土の中から検出されたもので現地性のものではない。土木分の調査区内からも同様の焼土が3基検出されており、併せて4基とも客土とともに他から運ばれてきたものであろう。

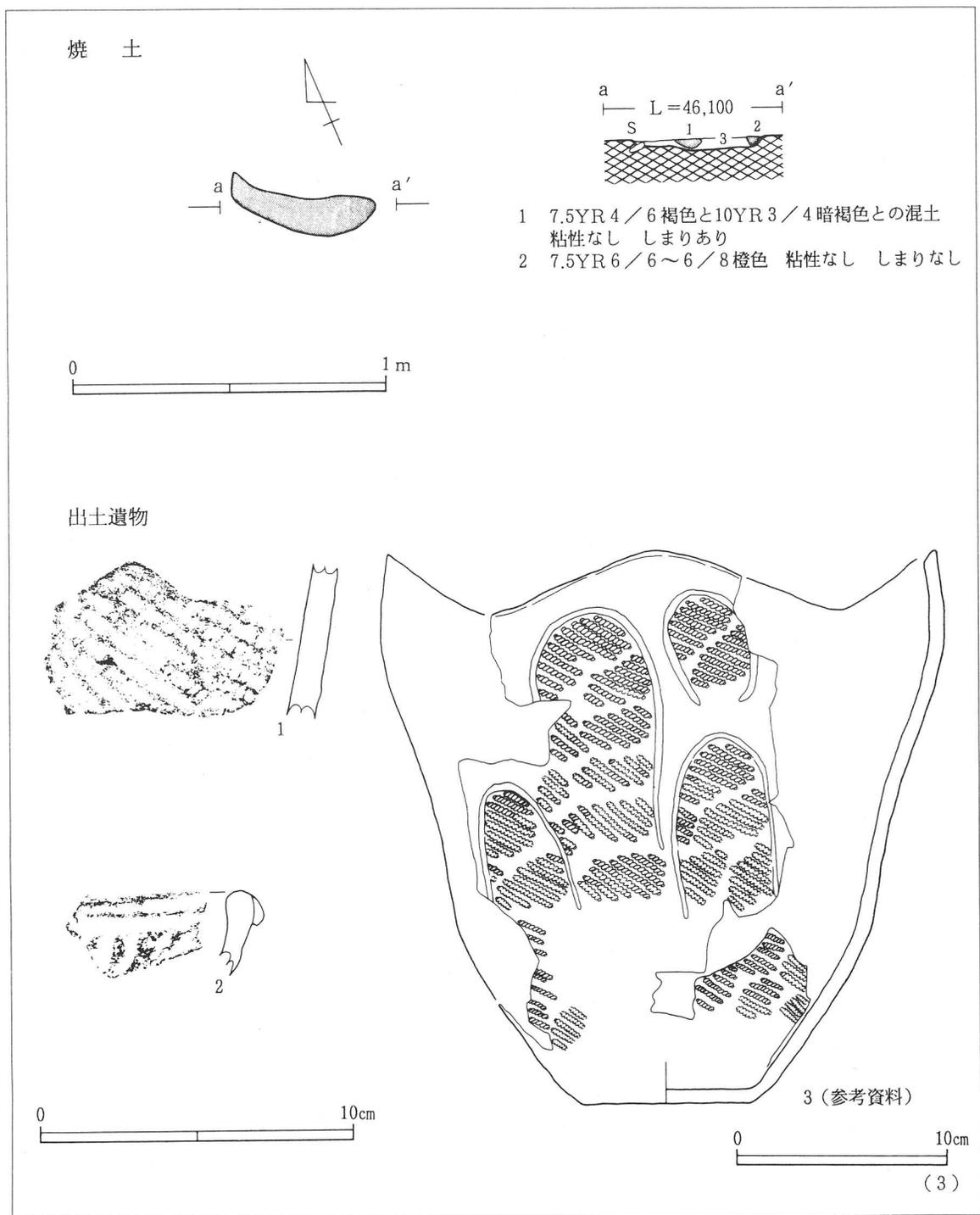
遺物の1は焼土中から出土したものである。磨滅しているが縄文時代中期ごろの深鉢の胴部と思われる。周辺からも同じような時期の土器片が出土しているのでこの焼土の時期は縄文時代中期頃の可能性もあるが、動かされた土の中からの検出のためこの遺物の時期と遺構の時期が同じであるとは断定できない。

3. 遺構外遺物（第7図-2・3）

調査区外の遺物は他の磨滅した遺物の本来の姿をもっともよく示していると思われる。土木分から出土した遺物の中からもこれほど接合したものはない。ただし、出土した土器片を見るとほぼ同じ文様が描かれており、同時期（縄文時代中期後葉）の土器が壊れて散在していると考えられる。遺物の3は、緩やかな波状口縁をしており、おそらく4単位になるものである。文様は逆U字型の沈線が胴部中ほどまで描き、その後区画内及び胴部中～下部は単節縄文が施されている。内面は磨滅しているため明確ではないが丁寧にナデられた部分も見える。

4. まとめ

今回の調査では、遺構としては焼土のみ検出されたが、縄文時代中期後葉の土器が含まれていたことにより調査区周辺において同時期の遺構が存在する可能性がでてきた。現にすぐ近くにある醍醐寺跡とされる伝承地は、先頃まで縄文時代中期の土器が豊富に拾えた場所であり、また、調査区周辺は日照条件や水の確保、食糧の確保など当時でも良好な生活地であったことが想像されることから、集落などの遺構の存在が期待できる。



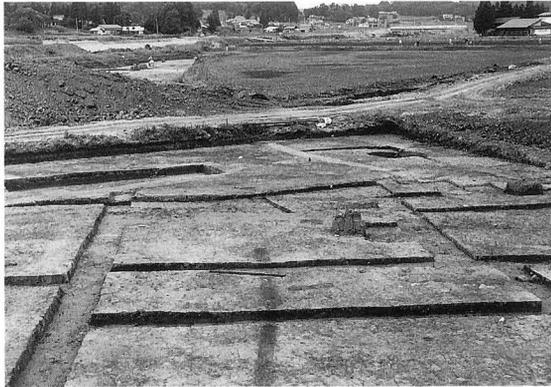
第7図 焼土及び出土遺物

番号	出土地点・層位	器種	部 位	文 様・その他	内面	図版	写真
1	焼土内 III層下位	深鉢	胴 部	LR縄文	ナデ	7	2
2	IE5 a III層	深鉢	口縁部	折り返し口縁 沈線	ナデ	7	2
3	調査区外 水路	深鉢	口~底	波状口縁 逆U字形沈線 LR縄文	ナデ	7	2

写 真 图 版



遠景



近景



火山灰出土状況



焼土検出状況

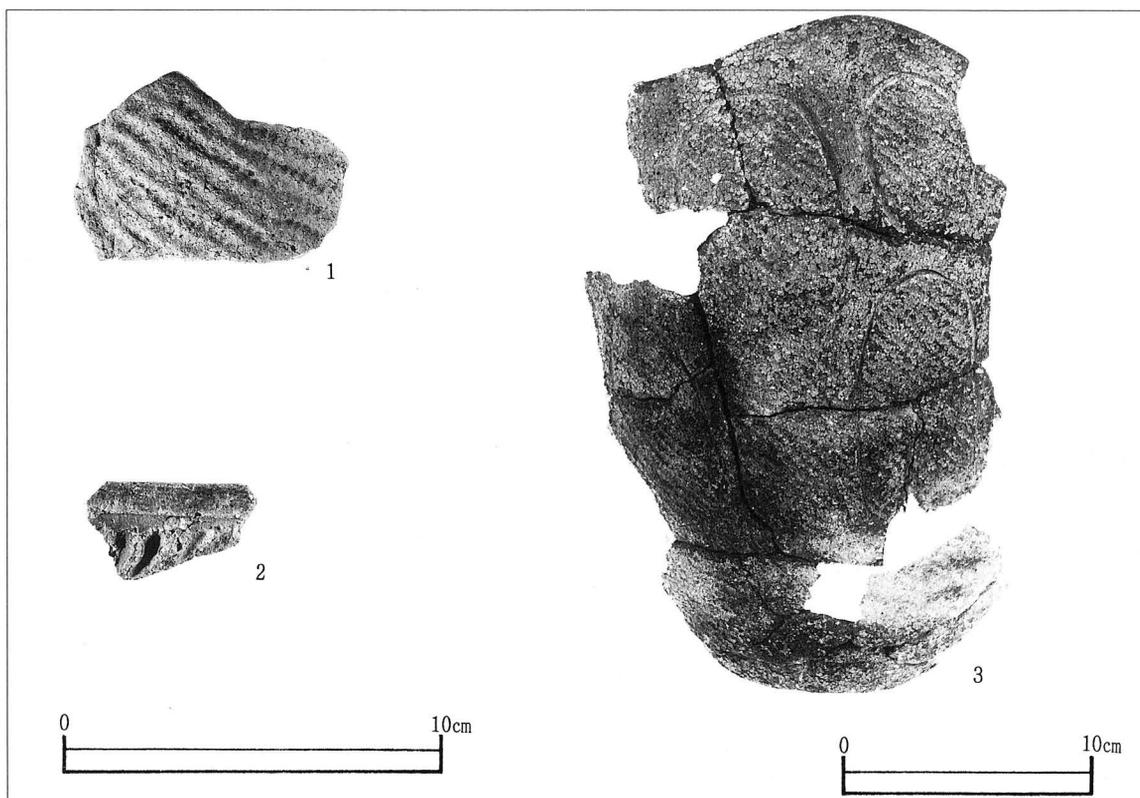


調査風景



焼土断面

写真図版 1 近景・焼土



写真図版 2 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	しもだいごいせきはくつちょうさほうこくしょ			
書名	下醍醐遺跡発掘調査報告書			
副書名	県営担い手育成基盤整備事業原体地区関連発掘調査			
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書			
シリーズ番号	第326集			
編著者名	木戸口俊子・高橋與右衛門			
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター			
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL 019(638)9001			
発行年月日	西暦1999年11月30日			
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経
しもだいごいせき 下醍醐遺跡	いわてけんえきししたはらぎこうのまえ 岩手県江刺市田原字高野前95ほか	03212 NE08-2047	39° 10' 10"	141° 12' 37"
調査期間		調査面積	調査原因	
平成10年6月15日～6月30日		280㎡	県営担い手育成基盤整備事業原体地区に伴う緊急発掘調査	
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
散布地	縄文時代	焼土	縄文土器	

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

	所 長	佐 藤 基			
	副 所 長	伊 藤 直 司			
	[管理課]				
	課 長	川 浪 清 徳	嘱 託	藤 島 恵 子	
	主 任	立花 多加志	〃	新 田 ト ヨ	
	主 事	日 影 睦 夫	〃	佐々木 光 恵	
	[調査第一課]		[調査第二課]		
	課 長	小 田 野 哲 憲	課 長	高 橋 與 右 衛 門	
	課 長 補 佐	佐 々 木 清 文	課 長 補 佐	中 川 重 紀	
	主任文化財	酒 井 宗 孝	主任文化財	高 橋 義 介	
	専門調査員		専門調査員		
	〃	小 山 内 透	文 化 財	古 舘 貞 身	
	文 化 財	中 田 迪	専門調査員	〃	
	専門調査員	吉 田 充	〃	阿 部 眞 澄	
	〃	鎌 田 勉	〃	松 尾 芳 幸	
	〃	小笠原 健一郎	〃	小 原 眞 一	
	〃	鳥 居 達 人	〃	工 藤 徹	
	〃	濱 田 宏	〃	前 田 稔	
	〃	佐々木 進 悦	〃	金 子 佐 知 子	
	〃	安 藤 由 紀 夫	〃	岩 渕 計 悟	
	〃	木戸口 俊 子	〃	早 坂 務 光	
	〃	小野寺 正 之	〃	佐々木 雅 光	
	〃	阿 部 勝 則	〃	晴 山 雅 之	
	〃	千 葉 正 彦	〃	星 琢 人	
	〃	羽 柴 直 人	〃	佐々木 昭 太 郎	
	〃	高 木 晃 一	〃	杉 沢 浩 二 郎	
	〃	佐 藤 淳 一	〃	溜 村 忠 昭	
	〃	菅 原 靖 男	〃	北 金 子 昭	
	〃	半 澤 武 彦	〃	鈴 木 聡	
	〃	朝 倉 雄 大	期 限 付	鈴 木 聡	
	〃	菊 池 貴 広	專 門 職 員	〃	
	〃	村 上 拓 規	〃	平 澤 里 香	
	〃	本 多 準 一 郎	〃	布 谷 義 彦	
	〃	中 村 直 美	〃	山 口 俊 規	
	〃	丸 山 浩 治	〃	熊 谷 佳 恵	
	〃	佐 藤 綾 子	〃	吉 田 里 和	
	期 限 付		〃	吉 北 吉 川	
	專 門 職 員		〃		
	〃	平 め ぐ み			
	〃	藤 原 賢 徳			
	〃	江 藤 敦 敦			
	〃	小 林 弘 卓			
	〃	小 原 広 幸			

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 326集

下醍醐遺跡発掘調査報告書

県営担い手育成基盤整備事業原体地区関連発掘調査

印刷 平成11年11月25日

発行 平成11年11月30日

発 行 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 盛岡市下飯岡11-185
T E L 019-638-9001 F A X 019-638-8563
印 刷 (有) 博光出版
〒020-0122 盛岡市みたけ 5 丁目 8 番43号
T E L 019-641-0671

©(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1999

